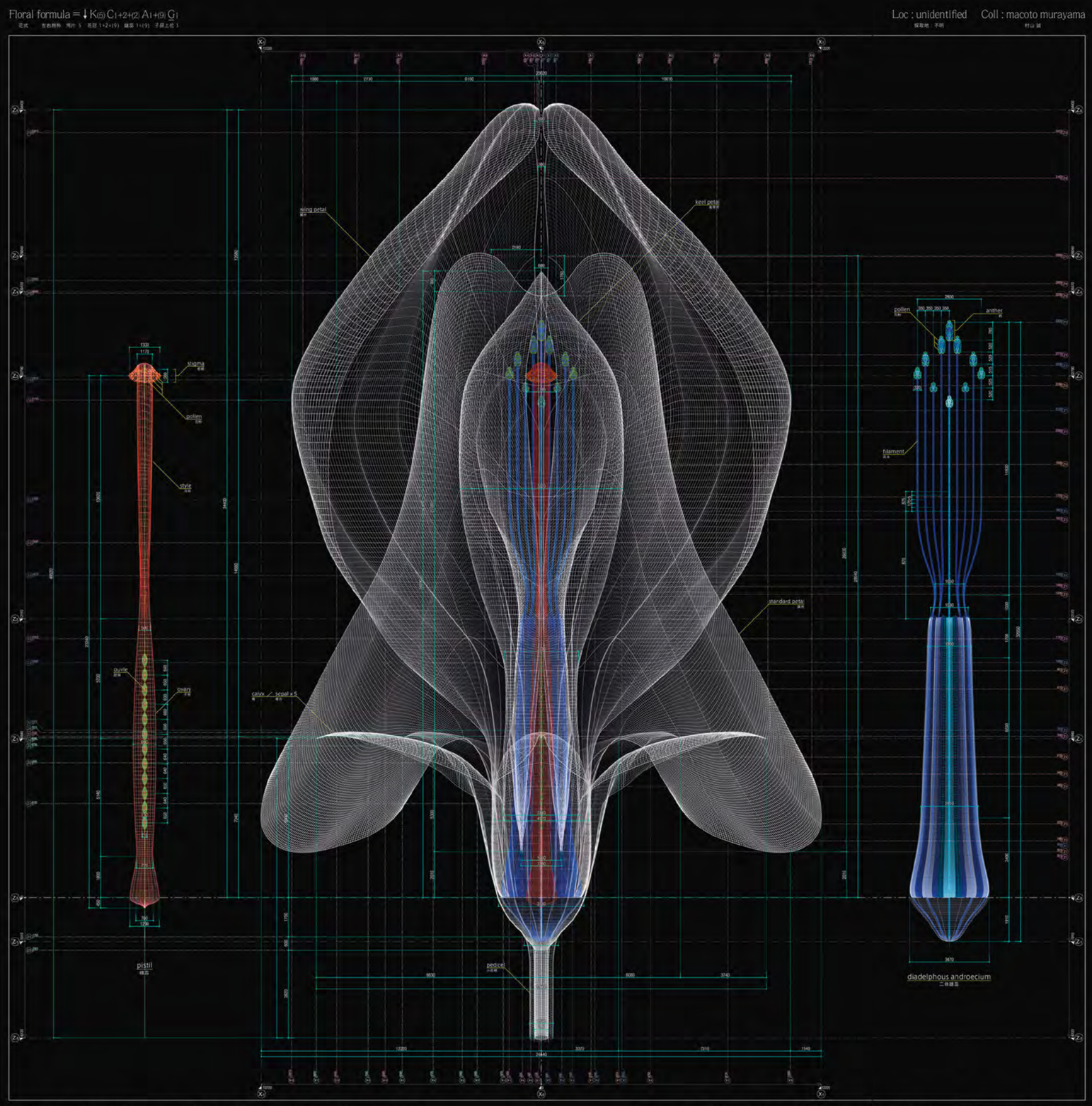


未知なる花園

身近なようで、実はその構造についてはあまり知られていない野に咲く花。
花の構造に魅せられて、科学の領域にまで足を踏み入れるアーティスト、
村山誠のユニークな作品づくりをひもとく。

文 室田 美々

ニューメディア・アーティスト、村山誠の作品は、一見すると深海を浮遊する未知なる生物のようであり、それが「花」であることに気づくまでに数秒を要する。ワイヤーフレームと呼ばれる3D技術の繊細な線と優美な曲線によって内部まで完全に透かして描き出された花は、見る者の心を瞬時に惹きつける強い力を持つ。だが花本来の性質である、万人に与える「親しみ」や「温もり」といった印象は見出せない。デジタルの無機質な質感と図面や設計図の持つ冷静な視点によって、未知なる異国の地に咲く近寄りがたい花を見つめている感覚に襲われるのだ。

「無機植物相（Inorganic flora）」をコンセプトに、最新の3D技術を用いて植物の構造を綿密にビジュアライズしていく村山の作品は、海外のさまざまなプレスから高く評価されている。世界が注目する理由は、その唯一無二な作風と存在感に他ならないが、彼独自のユニークな制作アプローチにも関心が向けられている。村山は、「アトリエの一角でピンセットを手に顕微鏡を覗き込む姿を見た人は、僕のことを植物学者だと思うかもしれない」と笑う。

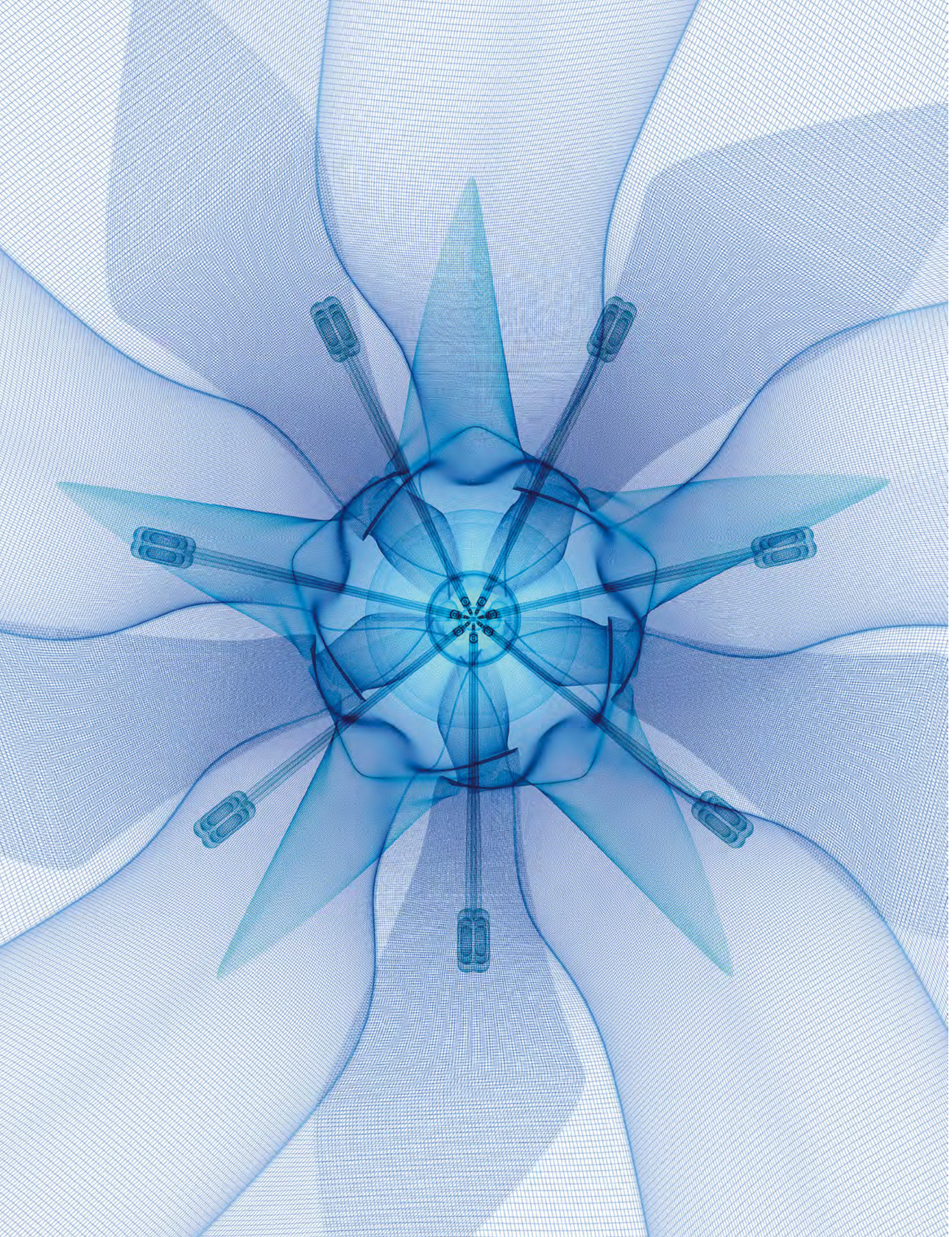
村山の作品づくりは、野や山へ足を向け、モデルとなる花を自ら採取するところから始まる。持ち帰った花をカッターやカミソリの刃で花弁や子房に至るまで細かく解体し、顕微鏡やルーペを覗きながら植物の断片や組織の構造の分析を行う。そして、あらゆる角度から写真に記録し、スケッチを幾度と重ねる。いわばここまでがアナログ作業であり、デジタル作業へ移るのは、その後だ。

「Autodesk 3ds Maxを使用し、花のパーツごとに形態や構造のモデリングを行い、レンダリングとレイヤーを重ねてCG上に花を再構築します。僕が表現したいのは、美しさではなく、その花のあるべき姿。理論的な理想の形を探すため、アナログとデジタルの世界を行き来する果てのない旅を繰り返します」。

幼少期を「図面を見て形を想像するのが好きな子どもだった」と振り返る村山は、2003年、建築を学ぶため、宮城大学のデザイン情報学科空間デザインコースへ進学した。ところが、そこで出合ったCG技術によって、将来の夢も人生も大きく方向転換されることになる。

「自由な発想で作品をつくれるのが面白くて、建築よりもCGの世界へのめり込んでいきました。そして、卒業設計で制作したのが『無機植物相』。制作にあたり参考にしたのが、17世紀から19世紀に流行した植物画の『ボタニカルアート』と車などの製品の内部構造図である『テクニカルアート』です。図面好きな僕がそこへ行き着いたのは自然な流れだったのかもしれません。一瞬にして視覚的に情報を伝達する図の持つ力に惹かれたというのもありますが、『ボタニカルアート』には機械的な側面、『テクニカルアート』には生物の内臓を眺めているような側面が垣間見られ、共通する部分があった。ふたつを融合させて面白い表現ができないか。その発想からCG上に植物の機械的な側面を表現するひとつめのシリーズである『ボテクアート』が生まれました」。

卒業後は情報科学芸術大学院大学（IAMAS）へ進み、さらに完成度の高



PHOTOGRAPHS: FRANTIC GALLERY, JAPAN

［前見開きページ］
「*Lathyrus odoratus* L.」。
野に咲くスイートピーも
村山の手にかかると、異国の
花のように見える。
［当ページ］
（上）「Transvaal daisy」の
なかでは、ガーベラの花が
ヒマワリのようにも見える。
（下）まるでカクテル・
グラスのような
側面から見たサツキ。
［左ページ］
日本の春を告げる
ソメイヨシノ。
先端が2裂した、
花粉を生成する葯を有する
雄しべをクローズアップ。

い作品制作に力を注ぐ。その頃から花の解体作業が本格化し、設計図に用いられる名称、寸法、角度などの要素を表現に取り入れた植物の解剖図により近い『ボタニカル・ダイアグラム』というふたつめのシリーズを誕生させた。

「ふたつは似ているようでコンセプトは大きく異なります。僕のアート感覚を多く含んでいるのが『ボテクアート』ならば、僕の花に向ける視線をもとに感情を排除して花の解剖結果を忠実に反映させたシリーズが『ボタニカル・ダイアグラム』です」。

村山は、これまで一貫して「花」をモデルにしてきた。なぜ、花なのか、どこに惹かれるのか、それは彼も知りたい答えだった。そして、村山が人間的にも興味深い点は、その答えを見つけるために生花店の門を叩いたことだ。彼はアーティストという肩書きを持つ一方で、驚くことに現在も生花店で広報の仕事をしながら、花と人間の関係性を探り続けている。

「その仕事を通して僕は花の色や香りなどの表面的な部分に美しさを感じるのではなく、花の持つ構造に面白さと神秘性を感じて作品に表現したいのだと改めて知りました。その証拠に店頭でアレンジメントをつくってみたこともありましたが、どうもお客様に喜ばれるものに仕上がらない。花を見つめる視点が一般の人とは異なる場所にあるからです。花を解体する時、毎回、発見と驚きがあり、胸がときめきます。ユリにバラ、スイートピー、コスモス、選ぶ花の基準はありません。世界のあらゆる花を解体して作品にしたいと思っている。僕にとって花は作品制作の原動力であり、かけがえのないパートナーです」。

村山が描き出す花は、冒頭で述べたように、神秘的な美しさは感じても情緒は誘わない。それは、花を見つめる村山の視線が一般とは違う冷静さを保っているからであり、また、彼が意図して感情を押し殺し、作品と向き合っているからでもある。

「ユリなら、ユリには決して存在しない色でデザインします。見る人に未知なる花を見つめている感覚を呼び起こすことで、その花の新たな一面を伝えたいと思うからです」。

彼は自身のことを「飽きっぽくて感情を表現するのが苦手な、無口な人間」と説明する。続けて、「そんな自分が『無機植物相』という作品づくりと出合い、自分でも全く想像していなかった世界を歩いている」と語る。一昨年は連続した模様を描く「ボテク・コンポジション」という3つめのシリーズを発表し、現在は動画制作にもチャレンジしている。将来的には植物学者とコラボレーションして、科学的な正確さと芸術性を兼ね備えた、次世代へ向けたデジタル版の3D植物図鑑の製作を目指すという夢が広がっている。彼のクールな作品の背後には、情熱とロマンチシズムが溢れ返っている。村山はアーティストとしてさらにブラッシュアップを重ね、観る人の心を魅了する作品を生み出し続けていくに違いない。❖

「パテック フィリップ マガジン・エクストラ」（patek.com/owners）にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧いただけます。